



教頭会報

第111号

発行 平成22年10月1日
編集兼発行人 榎本 桂子
発行所 全国公立学校教頭会
東京都港区愛宕1-6-7
電話 03-3436-4868～9
zenkokyo@kyotokai.jp
http://www.kyotokai.jp

全公教 研究活動の展望

全国公立学校教頭会
副会長 荒木文郎

第52回全国公立学校教頭会研究大会が、7月28日（水）～30日（金）の3日間北海道旭川市で開催されました。全国統一研究主題「生きる力をはぐくむ豊かな学校をめざして」のもとに、全国から3,000余名の会員が参加し、熱気あふれる研究協議がなされ、第八期を総括するにふさわしい充実した研究大会となりました。

参加型の研究大会として、分科会におけるグループ討議はすっかり定着しており、「北の大地～広さとぬくもり そして力強さ～」のスローガンどおり、実行委員会の先生方をはじめとする大会関係者の、上質なおもてなしの心を随所に感じさせる洗練された運営であったと思います。

ご承知のとおり、全国公立学校教頭会は、各地区教頭会と連携し「副校長・教頭の社会的地位の向上」を目的に、「研究活動の推進」を柱として、半世紀以上の歴史の中で、教育に関する「政策提言能力を備えた職能団体」を標榜し、活動してきています。「副校長・教頭職の職能の向上、専門的資質の研究・追求」をする活動は、まさに全国公立学校教頭会の「命」と言えるものであります。

本年度は第八期3年次となり、その成果を検証し、第九期に向けた実践的研究をさらに深めていかなければなりません。第九期の全国統一研究主題は「豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして」であります。学習指導要領において、教育の基本理念は「生きる力」の育成であることが改めて示されています。子どもの生きる力として重要なものは、「思いやり等の豊かな心を育てる」ことと、「学んだことを生かして新しいものを生み出す力を育てる」ことです。さらに教育基本法の前文に「豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに・・・」とあり、それらを集約したものが、

全国統一研究主題となっています。

また、旭川大会の特I分科会において、教育学関連学会の研究者との交流と共同実践による「日常の研究実践の理論化」ということを、今後の研究活動の一つの方向性として新たに提案させていただきました。これは、これまでの研究の方向性が副校長・教頭の固有の役割を考えるというよりは、学校組織マネジメントやリーダーシップの一側面として副校長・教頭の役割を捉えようとする傾向が強いように思えたからです。

今後は、「政策提言能力を備えた職能団体」として政策提言にとどまらず、将来的には教育政策決定の重要なパートナーとしての役割と機能が、全国公立学校教頭会にも求められるような研究活動を推進していきたいと考えています。

そのためには、全国研究大会をはじめブロック研究大会、都道府県教頭会研究大会の開催を中心とした、日常の実践的研究活動への会員の意識的・意欲的な参加とその内容の充実と発展が重要になってきます。また、職能団体である全国公立学校教頭会が、副校長・教頭の子どもと教育の現実を踏まえた専門性についての洞察を深めることは、その研究・研修活動を通じて、個々の副校長・教頭による学校運営の質を高めることにつながることであります。

「副校長・教頭職」が社会から尊敬され、信頼される魅力的でやりがいのある専門職として認識されるために、継続的・系統的な実践的研究活動への取組を大切にしていきたいものです。

全国公立学校教頭会の研究活動を充実・発展させ、「職能団体としての教頭会」の社会的信頼を高めるためにも、会員の皆様一人一人のご理解・ご協力をお願いいたします。

第52回 全国公立学校教頭会研究大会

第44回 北海道公立学校教頭会研究大会

大会主題 「生きる力をはぐくむ 豊かな学校をめざして」

－開かれた学校づくりの推進とたくましく生きる子どもの育成－

第52回全国公立学校教頭会研究大会が7月28日（水）、29日（木）、30日（金）の3日間、北海道の旭川市で開催された。全国から約3,100名以上の会員と一般参加者が集まり活気のある研究大会となった。

初日は、開会行事に続き郷土文化の紹介、全体シンポジウムを行った。開会行事では、全公教の榎本会長と旭川大会実行委員会の古谷委員長の挨拶に続き、文部科学大臣様（代読 初等中等教育局視学官の三好仁司様）、北海道知事様他、多くの関係者の方々からの祝辞を頂いた。

郷土文化の紹介では、平成21年度に全国大会に出場した旭川市立緑が丘中学校と110名の部員を要し、全日本吹奏楽コンクールや全日本アンサンブルコンテスト等に何度も出場している北海道旭川商業高等学校の2校の吹奏楽部の見事な演奏に続き、旭川チカップニアイヌ民族文化保存会の皆さんによるアイヌの伝承芸能である古式舞踊の紹介があった。

午後の全体シンポジウムでは、「こころを通い合わせ 人間力・教師力・学校力を高める」をテーマに3名のシンポジストの体験や実践を通じたメッセージを頂くことができた。

2日目は、市内のホテルや公共施設等を会場にして分科会を行った。全国から参加した会員による参加型分科会による討議で、各分科会場とも盛りあがりを見せていた。

3日目は、記念講演が行われた。「北の大地でたくましく生きる動物たち」という演題で、前旭山動物園園長の小菅正夫氏によるお話をうかがった。行動展示という発想を取り入れ、入場者数日本一の人気動物園としての隆盛を築いた小菅氏の人柄にも触れ、講演があっという間に過ぎてしまった。

自然に恵まれた北の大地での3日間の研究大

会は、綿密な準備と心配りで、参加者の心に豊かな気持ちと十分な満足感を与えるものであった。

【全体会場】 大雪アリーナ

【郷土文化の紹介】

- ・旭川市立緑が丘中学校 吹奏楽部の演奏
- ・旭川商業高等学校 //
- ・旭川チカップニアイヌ民族文化保存会のアイヌ古式舞踊

【全体シンポジウム】

- 「こころを通い合わせ 人間力・教師力・学校力を高める」
- ・コーディネーター
臼井 博氏（札幌学院大学教授）
 - ・シンポジスト
三好 仁司氏
（文部科学省初等中等教育局視学官）
大平 まゆみ氏
（札幌交響楽団コンサートマスター）
藤井 純一氏
（北海道日本ハムファイターズ
代表取締役社長）

【分科会場】 市内8施設 9分科会場

【記念講演】

演題 「北の大地でたくましく生きる動物たち」

講師 小菅 正夫氏（前旭山動物園園長）



分科会

第1 A分科会「教育課程に関する課題」

☆学校改善に学校評価を生かす取組

～評価システムの構築と組織的な取組によって～

岡山県矢掛町立三谷小学校 蜂谷 真治

☆新学習指導要領移行期間における教育課程の改善・充実と教頭のかかわり

～学校評価の結果を反映した移行期間の取組～

北海道苫小牧市立大成小学校 山形 知憲

☆根室の特色を生かし、たくましく生きる子どもの育成を目指すための教頭としてのあり方

北海道別海町立上西春別小学校 古森 康晴



第1 B分科会「教育課程に関する課題」

☆学校運営上の諸問題と教頭のかかわりについて

～小中連携教育から小中一貫教育をめざして～

高知県いの町立吾北中学校 尾木文治郎

☆地域に信頼される学校づくりを進めるための学校評価のあり方について

～学校評価を確かな学力の向上に生かす教頭の役割～

北海道弟子屈町立川湯小学校 木村 郁夫

☆創意工夫を生かした教育課程の編成・実施・改善と教頭のかかわり

～学校評価のあり方と教頭のかかわり～

北海道斜里町立斜里小学校 山田 覚



第2分科会「子どもの発達に関する課題」

☆人権を大切にする取組を推進する教頭のかかわり

～学校・家庭・地域との連携を通して～

福岡県豊前市立宇島小学校 末光 利光

☆心豊かでたくましい小樽の子どもを育てる教育活動の推進

北海道小樽市立長橋小学校 加藤 俊明

☆小・中の連携・接続を中心として開かれた学校づくりの推進

～中1ギャップに対応するための教頭としてのかかわり～

北海道帯広市立西小学校 棚澤 実



第3分科会「教育環境整備に関する課題」

☆「自立」の力を養い、「共生」の心をはぐくむための教育環境づくり

～コミュニケーション能力をはぐくむ教育環境づくりを目指して～

秋田県秋田市立秋田北中学校 齋藤 透

☆生きる力をはぐくむ 家庭・P T A 及び地域社会、他校種との連携と教頭のかかわり

～他校種との連携を充実させる教頭のあり方はどうあるべきか～

北海道様似町立鶯苫小学校 橋本 誠司

☆教育環境整備の改善・充実のための教頭のあり方

～家庭・地域社会との連携・協働を通して～

北海道音更町立柳町小学校 森本 聡



第4分科会「組織・運営に関する課題」

☆地域とのつながりを生かした学校運営活性化の試み

～新潟市「地域と学校パートナーシップ事業」の取組から～

新潟県新潟市立小針小学校 内山 英紀

☆教職員の協働体制づくりにかかわる教頭の役割

～P D C Aの評価サイクルを通して組織の活性化を図る～

北海道札幌市立清田南小学校 渡邊 悟

☆連続した学びの環境の創造と教頭のあり方

～縦の接続と横の連携に教頭としてどうかかわり組織を活性化させたか～

北海道三笠市立三笠中央中学校 菊地 博幸



第5分科会「教職員の専門性に関する課題」

☆ミドルリーダーの育成を核とした学校の活性化

～人材育成シートの有効的活用を通して～

石川県加賀市立勅使小学校 木戸口 勲

☆教職員の専門性を高めるための教頭の関与のあり方

～学校課題の解決に向けた方策を探る～

北海道函館市立中島小学校 畑中 雅昭

☆信頼される豊かな学校をめざし教職員の専門性をいかに高めるか

～教職員の資質の向上を図る手だてと学校職員評価制度の活用のあり方について～

北海道北広島市立大曲中学校 多田 貴典



第6分科会「副校長・教頭の職務に関する課題」

☆学校の危機管理における教頭の職務と役割について

～教職員や地域・家庭への教頭としてのかかわり方～

滋賀県愛荘町立愛知川東小学校 吉原 義彦

☆生きる力をはぐくむ 信頼される学校をめざして

～特別支援教育の校内体制づくりと教頭のかかわり～

北海道釧路市立共栄中学校 本川 敬一

☆豊かな学校づくりをめざした確かな教育活動の推進

～学校改善の取組と『教頭力』～

北海道黒松内町立黒松内小学校 丸岡 哲也



特別分科会Ⅰ「ワークショップ」

☆学校を学習する組織へ～同僚性の構築と子どもの学びあい～

講師 勝野 正章 氏(東京大学大学院教育学研究科准教授)

稲葉 義治 氏(富士市立田子浦中学校長)

野中 秀敏 氏(富士市立富士川第二中学校長)

特別分科会Ⅱ「シンポジウム」

☆北の大地のこころ ～たくましく明日を拓く～

基調講演「思うは招く」～だったら、こうしてみたら～

講師 植松 努 氏((株)植松電機専務取締役、カムイスペースワークス代表取締役)

コーディネーター 阿部 宏行 氏(北海道教育大学岩見沢校芸術文化コース准教授)

シンポジスト 佐藤 学 氏(夕張市建設農林建設グループ市営住宅担当主幹)

秋元 正智 氏((株)うろこ市代表取締役、北海道旭川方面公安委員会委員長)

尾崎 朋子 氏(旭川市小中学校教頭会、旭川市立東鷹栖中学校教頭)



こころを通い合わせ 人間力・教師力・学校力を高める

～広さと温もり そして力強さ～

コーディネーター 臼井 博氏（札幌学院大学教授）
シンポジスト 三好 仁司氏（文部科学省初等中等教育局視学官）
大平 まゆみ氏（札幌交響楽団コンサートマスター）
藤井 純一氏（北海道日本ハムファイターズ代表取締役社長）

——互いのこころを通わせること

問題意識を共有し、教師どうしの心を通わせるコミュニケーションが教頭の大切な仕事。いろいろな立場で仕事をしている3人の討論からヒントが得られるのではないか。



臼井 博氏

——たくましく生きる子ども

たくましさとは弾力性、つまりストレスや逆境の中においてもその影響を受けることを少なくする力、バネのような力強さである。

——たくましい人間の特徴

- ①希望を持ち続けること ②あきらめないこと
- ③人を信じること ④周りとの調和すること
- ⑤驚きのこころ、好奇心をもつこと。

明日の日本の将来を担う子どもをこのように育てることが大事である。

——人間力・教師力・学校力の向上

目に見える力もあるが目に見えない力、とくに興味をもつこと、持続的な関心をもつことが大事である。能力も表に現れないことも多いので見えることだけ見てしまうことは危険である。自分一人のできる力は優れたモデルがあることで伸びる。だからこそ協同的な学習が大事。学校も同じで共同体として仕事をするとな一人ひとりの人間力が伸び、教師の力も伸び、学校力が向上する。

——新学習指導要領への移行と学校の役割



三好 仁司氏

中身を変えるときは、いろいろな意見を調整しながら決まっていく。子どもの課題は地域の活動に参加できることが少なくなってきたことにある。消極的になっている点もある。調査では、社会との関わりの中でやりたいことが一つもないという子どもがおよそ1割。その反面、人に役に立つ人間になりたいという子どもは9割に上る。様々な可能性を秘めている。社会へのつながりを子どもに教えるのは家庭や地域社会がやるべきことであるが、学校がやるべきことは体験活動のきつ

かけになればよい。年間指導計画をきちんと立てることが大事であり、特別活動の観点別評価をすることの良さを理解して取り入れてもらうことを提案したい。

——コミュニケーション能力



大平まゆみ氏

こころを通い合わせることは大切であり、学校ではぜひコミュニケーション能力をもった子どもを育てて欲しい。それは相手を知るためであり、それが「優しさ」につながるからである。社会全体に「優しさ」が無くなってきているように感じる。「優しさ」のある温もりのある社会を作っていくためには、子どもたちが相手を思いやり、相手の思いを感じ相手の身になって考える力をもつように育てて欲しい。相手を知るためのコミュニケーション能力が重要になる。先生にも「優しさ」が必要で、「優しい」子どもを育てることにつながると思う。



(演奏を披露)

——やる気をもつ人を育てること



藤井 純一氏

野球の球団の経営を通して、やる気のある人間を育てることは教育に通じる。集客のためファンを獲得し地域に根ざすことをやり、魅力ある球団にするためにいろいろと工夫した。その工夫が生きる力である。今の社会人に求める力は「自分で思いつく力」「作り出す力」「自分を変えられる力」である。まさに力強く生きる力そのものかも知れない。学校教育の中で、実際にどのような力をつけようとしているのか、見えにくい。また、今の英語教育で本当に世界に通用する英語力がはぐくまれるのかと感じる。どのような人間を育てるのか、学校が保護者や地域、社会に明確に示し、共有することができれば一つの目標に向かって一体となって子どもたちをはぐくむことができると思う。このことが学校力を高める一つのポイントになるのではないかと考える。

●記念講演

「北の大地でたくましく生きる動物たち」

前旭山動物園園長 小菅 正夫 氏

元来の動物好きで、中学から始めた柔道が強くなりたいと願って、北海道大学の獣医学部へ進学し、柔道漬けの日々を送った。大学4年の3月、何とか卒業に漕ぎ着けた氏に旭山動物園の求人票が目にとまった。めでたく合格し、獣医師兼飼育係としての生活がスタートする。エピソードを交えた軽快な語り口調で、聴衆の心を引きつけてくれた。

氏の入園当時の動物たちは、全部同じような檻の中にいた。コンクリートに囲まれた四角い部屋の中では生き物の本当の姿や素晴らしさは分らない。

動物たちには、自分らしさを表現できる環境をつくるのが大切である。例えば、チンパンジーには、高さの空間が必要で、高い所から人を眺めていると、安心して自然の姿をみせる。

そういう空間をつくれば、自然と能力を発揮できるし繁殖率も上がる。自分の能力を遺憾なく発揮するナンバーワンの環境をつくってやればよい。動物は、それぞれナンバーワンで生きているし、ナンバーワンしか生き残れないのである。動物はそれぞれにナンバーワンをもって生きている。動物は種によって、姿・形が異なる。それは生きていくための必然で意味のあることである。動物たちは何のために生きているかという食と繁殖することと繁殖するためである。長生きして、命（種）を絶やさないようにするためである。

ペンギンの散歩は、彼らの自由意志で行っているので強制はしていない。キングペンギンは、人を嫌がらないがゼンツーペンギンは嫌がる。それは、生息地や人との関わり、体験の違いによって生じている。

ホッキョクグマは、海の生活に適応して体を大きくして寒冷地に適した体型になった。元々単独で暮らしているため、仲間と遊ぶことはないが、楽しければ単独で遊ぶ。「群れ」と「単独」では、生態が違う。キャッチボールは群れて生活しているもの、つまり、相手への意識があるものが行う。

アザラシは、陸上が苦手なので人を威嚇するが、水中ではナンバーワンなので、平気で人に近寄る。

動物園では、それぞれのライフスタイルを尊重した飼育が必要である。動物たちは、生きる目的をしっかりとっていて、自らの意志で活動している。

たくましく生きる動物の個体ごとの特性を具体的に挙げながら、北の大地で精一杯生きている動物たちの様子を楽しく語っていただいて、有意義な時間を過ごすことができた。



第52回 全国公立学校教頭会研究大会

旭川大会をふり返って

旭川大会実行委員長 古谷 雅幸

第52回全国公立学校教頭会研究大会旭川大会は、7月28日～30日に北海道旭川市で、会員約3,000名、一般約125名の参加者を得て無事終了いたしました。

本大会は、第八期全国統一研究主題「生きる力をはぐくむ 豊かな学校をめざして」のまとめの年として、副主題を「開かれた学校の推進とたくましく生きる子どもの育成」と設定し開催いたしました。昨年の千葉大会での「絆づくり」と「夢かたり」の流れを受け、大会スローガン「北の大地のこころ ～広さと温もりそして力強さ～」が、大会全体に流れるよう工夫してまいりました。

全体シンポジウムでは、札幌学院大学教授 白井 博氏をコーディネーターに、文科省視学官 三好仁司氏、札幌交響楽団コンサートマスター 大平まゆみ氏、北海道日本ハムファイターズ社長 藤井純一氏から、人間力・教師力・学校力を高めるための多くの示唆をいただきました。また、特別分科会Ⅱでは、植松電機 植松 努氏からの基調講演を皮切りに、道教大岩見沢校准教授 阿部宏行氏をコーディネーターに、様々な方々の提言を受け「北の大地のこころ～たくましく明日を拓く～」をテーマに、教頭が発揮すべき“底力”について語り合うことができました。

そして記念講演では、前旭山動物園園長 小菅正夫氏に「北の大地でたくましく生きる動物たち」という演題でご講演いただき、動物たちのいのちはすべて意味がありこの世に存在しているという、たいへん感動的なお話を伺うことができました。

そして何よりも、各分科会で主題に沿った提言発表はもちろんのこと、その提言を受けて全国の副校長・教頭先生方が熱心にグループ協議に関わっている姿に、大きな感銘を受けたことは言うまでもありませんでした。

分科会会場などでご不便をおかけした点もあったとは思いますが、「中規模都市でも工夫すれば大会開催が可能であること」を、全国へ十分に発信することができたと確信しております。大会の成果と課題は現在集約しておりますが、後日収録等で報告させていただきますが、第九期の新たな研究が、和歌山から確実にスタートを切れるよう心から期待してやみません。

大会へご協力・ご尽力いただきました全公教ならびに全国各地の仲間の皆さまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



平成22年度

第1回 研究部長会

7月1日(木) 2日(金)

会場 都市センターホテル

第1回全国研究部長会は、7月1日・2日に都市センターホテルにおいて、各单位教頭会の研究部長と本部役員75名が出席し開催された。会場では第八期の「全国統一研究主題」及び「全国共通研究課題」についての説明を通して、全公教研究推進の基本的な考え方の共通理解と協議が行われた。

今年度は、全国統一研究主題第八期のまとめの年度でもあり、研究の基本目標や研究方針、研究方法や課題についての確認を行った。また、来年度以降の第九期の研究活動についての方向性も示され、意見交換を行うと共に本年度全国大会の旭川大会及び来年度の和歌山大会についての概要説明が行われた。

さらに、旭川大会特別分科会Iで取り上げる「同僚性の構築、子ども、教師の学びあい」について、<講演>・<グループ協議>を通して研修を深めた。学校現場や単位教頭会が抱える課題、方策、実践例について積極的な報告が多く出され、互いに深め合う講演・演習が実現できた。

【第1日目】14:00～

- (1) 第八期「全国統一研究主題及び「全国共通研究課題」について(春山研究部長)
- (2) 質疑応答
- (3) 講演・演習「学校を学習する組織へ」
～同僚性の構築と子どもの学びあい～
『東京大学大学院 教育学研究科

准教授 勝野 正章 氏』

旭川大会の特別分科会Iにおいて全公教が担当する「模擬校内研修」に向けて、同僚性に関する講演及びグループ協議を行った。グループ協議では、4人1組となり、各学校における「同僚性(教師のありかた)」、「子ども、教師の学びあい」について活発な協議が行われた。

【第2日目】9:00～

- (1) 全国大会について
 - ①旭川大会(北海道研究部長)
 - ②和歌山大会(和歌山県研究部長)
- (2) 第九期の研究について(研究部長より説明)
- (3) ブロック別懇親会(※ブロックごとに情報交換・協議を進める) 前日の勝野氏の講演・グループ協議や旭川大会特別分科会Iについて、第八期の「全国統一研究主題」・「全国共通 課題」への取組状況や課題、第九期の研究の方向性等について活発な意見交換や協議がなされた。
- (4) ブロック別懇談会での内容報告

平成22年度

全国要請推進部長会

7月13日(火) 14日(水)

会場 都市センターホテル

1 総務部の役割

総務部の役割は、副校長・教頭の地位向上と教育環境等の整備・改善のため要請活動を推進することです。要請と研究は全公教活動の車の両輪であり、この2つが充実・発展することによって副校長・教頭の地位向上と教育の充実に繋がっていきます。

(1)会場 都市センターホテル

(2)内容

7月13日(火)

①講演

演題『学校現場と教育施策』

講師 東京大学大学院准教授 勝野正章 様

②オリエンテーション 黒川総務部長

③グループ別討議

7月14日(水)

④文部科学省挨拶・講演

挨拶 文部科学大臣政務官 高井美穂 様
講演

演題 「今後の学級編制及び教職員定数改善について」

講師 文部科学省初等中等教育局
財務課長 高橋道和 様

⑤要請活動 単位教頭会ごとに実施

2 要請推進部長会

本年7月13日・14日に全国要請推進部長会を開催し、各单位教頭会毎に国会議員への要請活動を行いました。折しも要請推進部長会2日前の7月11日には参議院議員選挙があり、国政の情勢が大きく変わろうとしていた時期と重なってしまいました。以下要請部長会の概略を報告します。

特に今年は文部科学省より高井政務官・高橋財務課長をお迎えし、現在の学校教育を取り巻く状況等のお話を頂きました。高橋課長より、少人数学級実施のための法整備と予算確保のため、国会議員に伝えてほしい内容等の話もありました。文科省は第8次定数改善を行うための予算折衝を今後行っていきます。全公教も定数改善による少人数学級の実施は長年の悲願でもあり、今回の要請活動も少人数学級の実現を強く国会議員に訴えたところでした。今後も文科省をはじめ諸団体と連携しながら少人数学級実現に向けて活動していきたいと思っています。

シリーズ

北の南のわがブロック教頭会

東北ブロック & 近畿ブロック

東北ブロックの活動

東北ブロック長 小原 俊郎

東北ブロックは、青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島の6県からなり、会員数は3,280名(小学校2,220名、中学校1,660名)で、昨年よりも59名(昨年度46名)の減となっており、少子化に伴う学校の統廃合が進んでいる状況にあることがわかる。

全公教研究大会旭川大会には、東北ブロックから174名の会員が参加し、「北の大地のこころ」を感じながら熱心に講演・討議等で研究を深める姿が見られた。今年度の東北ブロックにおける研究大会は、11月11日・12日に岩手県盛岡市で開催されるほか、以下の通りである。

秋田県	10月29日	横手大会
宮城県	11月25日	大河原大会
山形県	10月7日・8日	高島大会
福島県	9月30日・10月1日	いわき大会

青森県：昨年度東北研究大会を実施。隔年開催により本年度は誌上発表になる。検討事項を整理しまとめに向け取り組んでいる。

秋田県：旭川大会第3分科会の提言を担当していただき、「コミュニケーション能力をはぐくむ教育環境を目指して」教頭とのかかわりについて発表いただいた。

宮城県：研究大会に向け準備の真っ最中、東北大会の参加者の調整にも取り組んでいる。

山形県：平成23年度県研究大会が2日開催から1日開催に代わることが決まっている。今年度の研究大会の準備を進めながら、次年度の開催に関わって会場や担当の分担などの検討事項が山積みになっている。

福島県：9月下旬に行われる研究大会に向けて準備の最終段階に入っている。併せて、次年度、東北大会郡山大会に向け、仕事内容や分担について検討を始めようとしている。

岩手県：東北ブロックの研究大会も間近になり、準備作業に余念がない。当日は、聖路加看護大学臨床教授 進 純郎氏による記念講演が予定されており、お産を通した「絆-こころを育てる」についてお話をいただく予定である。

近畿ブロックの活動

近畿ブロック長 上野 千佳子

近畿公立学校教頭会は、2府4県の教頭会で、会員数は4,306名です。各教頭会の活動内容は以下の通りです。

<大阪府> 第48回近畿公立学校研修大会

大阪大会が11月19日(金)大阪府立体育館で開催されます。「元気・つながり・ものづくり」をキャッチフレーズに、子どもたちが「生きる力」をはぐくむために、「居て良かった、居て楽しかった」といえる「豊かな学校」とするための環境づくり、学校づくり、地域づくりをめざし教頭としてできることは何か?を具体的に話し合えるよう、今、実行委員会が全力で準備をしています。

<和歌山県>全国の教頭先生方に、大変な心配をおかけしました「全公教研究大会和歌山大会」ですが、平成23年8月4日・5日に、和歌山で開催させていただくことになりました。本県は、高野山や熊野古道などに代表される世界遺産や、徳川御三家の城下町としても有名です。教頭先生方に「全公教研究大会和歌山大会に行って、良かった。」と、思っただけのような大会にしたいと思って、378名の和歌山県の教頭が、頑張ってまいりたいと考えています。よろしくお願い申し上げます。

<京都府>8月11日(水)に京都府総合教育センターにおいて、京都府小学校教頭会研究大会を開催しました。府教委説明の後、「学校の組織マネジメントの積極的推進における教頭の役割はいかにあるべきか」のテーマで、3分科会、20分散会に分かれて研究協議をしました。

<滋賀県>8月12日(木)に夏季教頭研修会を開催しました。講師に東京大学の勝野 正章先生をむかえ、「教職員の専門性を高める学校運営」をテーマにご講演をいただきました。午後から「教育課程に関する課題」など6分科会に別れ、意見交換をおこないました。県下約210名の教頭先生方にご参加をいただき、意義のある研修会を行うことができました。

<奈良県>夏の活動として、奈良県小学校中学校両校長会との懇談会、奈良県事務研究会との合同研修会を開催しました。また、八月の末には、本部役員会、評議委員会を開き、二学期以降の活動内容を協議しました。

<兵庫県>10月19日(火)午前10時よりたつの市総合文化会館 赤とんぼ文化ホールにて、第47回兵庫県教頭協議会研修大会を実施します。